

# ウィークエンダー

作 水沼 健

男 1  
男 2  
男 3  
女 1  
女 2

1

女が二人、川で洗濯している。犬が吠えている。八月。

顔 (川に川が重なって、大きくなり海まで流れていく。その大きくなるあいだのどこかに女が立っている。女の名前はヨシコということにする。ヨシコは川の流れを見ていると、何か忘れていたことを思い出せそうになるのを感じるが、そう感じるだけで、どうせ思い出せることがあるわけではない。たとえなにか思い出せることがあったとしても、そのうち思い出したことじたい、なんだか忘れてしまふ。)

女 1 なんだか忘れてしまふな。

女 2 さぼるなよ。

女 1 うん。ソロウ、ソロウうるさい。しかしおまえ慣れたもんだな。

女 2 なにが？

女 1 川で洗濯。

女 2 慣れてないよ。

女 1 あ、慣れてないの？

女 2 慣れてないよ。初めてだよ。

女 1 あ、初めてなの？

女 2 当たり前だろ。平安時代じゃないんだよ。

女 1 そうだったのか。慣れてるのかと思った。慣れてなかったのか。まあしばらくいるんだろ。慣れてしまえよ。

女 2 慣れたくない。もちろん二度とやらない。

女 1 ち。なんだよ、平安時代って。

女 2 なんだよ、平安時代って。



女1 おまえが言ったんだよ。  
女2 言ったな。それくらいじゃないの、あれは。  
女1 あれ？  
女2 あれは。桃太郎とかは。なんか流れてくるやつは。詳しくはないけど。  
女2 久しぶりに帰ってきたというのに、いきなり川で洗濯させられるとは。  
女1 文句いうな。雨が降らないんだからしかたないんだ。水が出なくて。みんな困ってるんだから。  
女1 うん。でもみんな困ってるわりには、ほかに誰も川で洗濯してないのだが。  
女1 そうだな。  
女2 なんで？  
女1 洗濯機でやるからじゃないかな。  
女2 水が出ないの？  
女1 たまに出るんだよ、朝と夕方に一時間づつ。その時にやるんじゃないか。  
女2 うちはなんでそうしない？  
女1 洗濯機壊れてるから。  
女2 え。いつから？  
女1 一週間くらい前から。断水になってすぐくらいだな。  
女2 直せよ。  
女1 やっぱそうか。ああいうのは自然には直らんか？ 叩いたりしてな。なんかむかし自然に直った機械あったよな、うちに。なかったつけ。なかったな。あ、おまえ直せないの？ そういうの得意じゃなかった？ なんか直してなかったつけ、そういう機械みたいなの。  
女2 得意じゃないし。直したことない。  
女1 ちがったか。  
女2 はやく直してよ。それかあたらしいの買えよ。なんで川で洗濯しないとけないんだよ。  
女1 わかった。しかしおまえが洗濯得意でひとまずよかったよ。  
女2 だから得意じゃないって。もう二度としないって。  
女1 ち。  
女2 ち、じゃねえよ。うー、すいかでも流れてこないかな。桃でもいいけど。  
女1 ソロウ、ソロウうるさい。  
女2 なに吠えてんの？  
女1 そりゃ、おまえが帰ってきて喜んでるんだらうさ。  
女2 そうかな。  
女1 それはそうだらうさ。







女2 うん？

女1 いきなり突然帰省して。

女2 べつに特に。

女1 ああそう。

女2 特に何も無いよ。

女1 仕事はいいのか？

女2 仕事はいい。休み取った。週末までいるかな。

女1 日曜日？

女2 まあそうかな。

女1 あそう。洗濯また頼むぞ。

女2 絶対やらないって。

女2 こっち終わったよ。

女1 じゃこっち手伝ってくれ。

女2 ふざけんなよ。

顔 (しばらく忘れていたことをいくつか思い出せそうになることが、なんどもある。しかしその思い出せそうなことが、最後まで言葉にならず、しばらく漂ったあと消えていく。そして一緒に思い出してくれ誰ももういない。妹は結婚してもうずいぶん前にこの町を離れて暮らしているし、父もいなくなってずいぶんになる。いや、ヨシコの父がいなくなったのはそんなに前のことではないけれど、みんな忘れていくか？いぶん昔の話のように思っている。妹ですらそうだ。)

女2 しかし男というものはなぜ、ああなのかな。

女1 ああとは？

女2 家に帰って座ると同時に靴下を脱ぎそのままにするのだろうか。

女1 ああ。

女2 なぜだと思う？

女1 忘れた。

女2 忘れた？

女1 いやむかし、おまえ父さんに同じこと聞いたな。

女2 え、聞いたかな？

女1 聞いた聞いた。

女2 あそう。でなんて答えたの。

女1 父さん？忘れたんだよだから。忘れたくらいだから大したことは言っていないと思うな。

女2 そうかな、そんなこと聞いたかな。

女1 あ、直してたのは父さんか。



女2 父さん？

女1 なんかも直してなかったっけ？洗濯機かテレビか何か。そうそう自転車とか。直すの得意じゃなかったっけ？

女2 知らんな。

女1 なんで知らん。

女2 知らんというか覚えてない。ヨシコだって覚えてないんだろ。

女1 あったよ。いや、なかったか。

女2 終わったぞ。

女1 うん。

女2 全然何にもしてないじゃないのヨシコ。

女1 そんなことない。もういっぱいいっぱい。ソロウ、帰るよ。

顔 (大切なものは川から流れてくる。これを見る、流れてきたんだぞと父は大きな柱時計を抱えて帰ってきた。そのことは憶えている。父は半年くらいかけてその時計を直していたが、鐘が鳴るようになっただけで、針は最後まで動かなかった。鐘の音は一時間に一回というより時計の気分によつて鳴ったり鳴らなかったりで、見ても聞いても時間がわからない不思議な時計になって今でも押し入れの奥で気が向いたときに鐘の音を打っている。)

女2 どうした？

女1 うん。

女2 ついにすいかが流れてきたか？

女1 うん。何にも流れてこない。

顔 (犬を最初に見つけたのはヨシコだ。前の日の台風で堤防いっぱいになり勢いが増した川からひっくり返って船の形になった犬小屋がそのまま流れてきた。犬小屋の中には二匹の犬がいた。父が必死に手を伸ばしてなんとかその船のうちの一人になった犬小屋を引っ張りあげた。犬を二匹とも連れて帰り、そのまま家族の一員になった。言った通りだな、と父は自慢げにヨシコに言った。犬はそれぞれジョイとソロウという名前を付けた。喜びと悲しみという意味だと父が言った。ジョイのほうはそのあとすぐに死んだ。悲しみのほうが残ったというわけだ。)

女1 名前反対にしておけばよかったな。

つづく

